

英米音の表記と大学英語教育

渥 美 正 平

I

英語発音教育において英語の発音表記法が果たす役割は極めて大きいと考えられる。その主たる2つの理由は、1つは綴り字とそれが表わすべき音声との乖離であり、他は所謂アクセントのある音節表示の必要性である。

綴りと発音の不一致は、周知の如く、any, gate, cat, father, want, wall, sofa, private 等における a の音価が皆異なることや、bee の母音に当たる綴りが, tea, meet, compete, believe, receipt, quay, key, marine, people, debris, foetus, Aesop, city (米) のように多種多様であることから容易に証せられる。如上の理由からして、英語発音教育に発音表記法を導入することは、外国語として英語を学ぶわが国の学生にとって多大の利益を齎すものと思われるが、特に、わが国の大学英語教育の現況に照らしても、次のことが言えよう。つまり、視覚補助教材としての発音記号の使用は、(1) 日本人に比べて英語の音声を直接聴いたり、発したりする機会に乏しいわが国の学生は、これによって、限られた時間を有効に活かすことが出来る。換言すれば、瞬間的に消えゆく音声を視覚的に捉えるため、聴覚像を喚起する手懸りとなって記憶を助け、それ故音声聴覚像の定着性が高まり最少の時間で最大の効果を期待し得る。(2) 大脳生理学で言うところの成人の聴覚的感受性並びに調音器官における柔軟性の欠如に由来する所謂母国語の干渉を防いで、正しい調音指導に基く正しい発

音の効果を著しく増大する。(3) 例えば、精密表記に象徴される音声の知的分析は細かい異音的差異に対する感受性を高め、音声の認知能力と表現能力の増進に役立つ。(4) 従って、一旦それを体系的に習得させれば、発音矯正に役立ち、学生間の発音の個体差が減少する。また、(5) 学生自身教師に頼らずに未習の語句の発音を辞書から直接学ぶことが出来るようになり、音声学習上の制約が軽減される。このような利点を裏書きすると思われるものとして、Gerhard の次の言葉は参考になろう。

For most of thirty years, however, I have been directly involved in the absorbing and constantly challenging problems of helping foreign students to a more satisfactory pronunciation of (American) English speech, and, though I have encountered innumerable varying techniques and experimented personally with many, for practical and tangible results in improved performance on the part of my students I still know of nothing more effective than extensive careful reading aloud of simple phonetic transcriptions.¹

それでは如何なる表記法を以てするのがよいかということになるのであるが、本論では、表題の示すように、大学英語教育を対象としているので、教育的価値を考慮に入れた実用的表記に焦点を絞ることとする。

II

従来のがわの辞典や教科書類は、久しい以前には Webster 方式の発音表記法が用いられたこともあったが、ここ数十年専ら IPA に準拠した Jones 式が使用されて来た。この方式は標準英語音とされている Received Pronunciation (略して RP) の表記に適したものであるが、戦後特に必要とされて来ている米語音の表記には不適當であり、現に Jones 自身、彼の著書において米音表記に一章を設け、別の記号体系を用いている位である²。しかし、これ等英米音をそれぞれ別個の記号体系で表記す

ることは、徒らに記号の数を増し、煩瑣なものとなる憾みがある。そこで出来るだけ少ない記号を用いて、英米音を同一の記号体系で表記する方法を教育面から考えてみようと思う。ここで英米音を同一の記号で表記せんとする場合、Webster 式が一応考慮の対象になり得よう。特に近年 Chomsky 及び Halle が *The Sound Pattern of English* (1968) の中で

“It is therefore noteworthy, but not too surprising, that English orthography, despite its often cited inconsistencies, comes remarkably close to being an optimal orthographic system for English.”³ と言って、矛盾不統一と思われる綴りの多くは発音通りで規則的であるということ述べていることから察せられるように Webster 式に準じた表記の試みも散見され、⁴ その優れた面も認められるが、Webster 式表記は綴りを成る可くその儘にして使おうとするため、一つの発音に対して非常に多くの diacritical mark を与えるから煩雑な面があり、結局、記号を覚える労力は I P A 方式や Jones 式に比べて優るとも劣らないと考えられる。また、現実に I P A 乃至 Jones 方式の表記法は、英和辞典を始めとしてわが国の英語教育界に定着しているので、学生側としても言わば馴染みのものであるから、後者の表記法を出発点とする方がよいという視点に立って論旨を進めたい。尚、ここで米音とするのは一般米語 General American (略して G A) である。米音は中西部型、東部型、南部型と3つに大別されているが、このうち中西部型は全米の大半を占める地域に住む約8%のぼる米国人によって使用されているので一般米語とされ、わが国で戦後発行された辞書でも、米音として G A が採り上げられているのが実状である。

III

英米音の表記法として考えられるものに、音声表記 (Phonetic transcription) と音素表記 (Phonemic transcription) がある。音声表記の

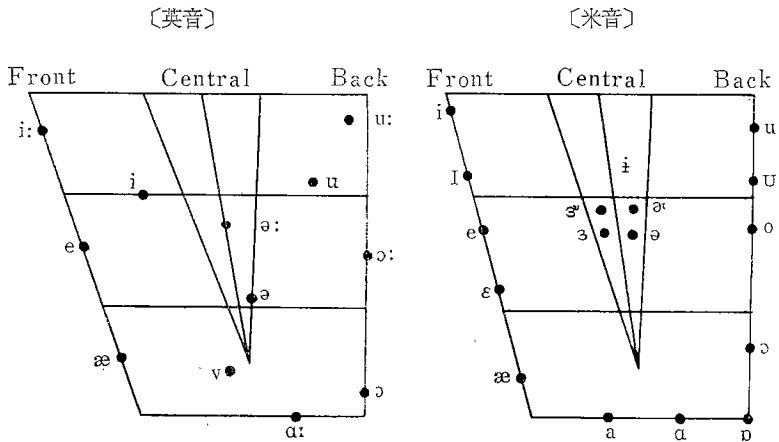
分析の精密化に伴い記号の数が増加し、所謂精密表記 (Narrow transcription) は教育的には適当でない。さりとて簡略表記 (Broad transcription) も何を基準にして簡略化するかということになると中々難かしい問題である。そこで音素表記ということになる。音素 (Phoneme) とは互に音声的に類似し、且つ、相補的分布をなす異音群 (Allophones) を纏めた音の単位であるが、或る2つの音が同一の音声環境に現われる場合、知的意味の違いを生ずる対立があれば両者は別個の音素とされ、無ければ同一の音素とされるのである。こうした基準の導入により、音素記号が設定され、1つの音素は1つの記号で表記するという原則が確立されたので表記そのものは極めて単純化された。しかし、音素そのものは実際に発音される際に或る程度の変差をもつ幾つかの異音を同一のものと認め、1つの範疇として抽象した言わば意識の上だけの虚構の存在である。換言すれば、Greenbergも言う⁵ ように、英語を話す者にとっては、例えば、/k/ 音素は意識内で1つの単位要素として機能しており、心理的実在をもっているものである。心理的実在とは「つもり」とも言える。つまり、同じ/k/の発音をしているつもりでも、実際には色んな異音が生じるのである。故に音素表記を利用する者は各音素の分布を正しく把握していることが望まれる。従って、教

	両唇音		唇齒音		齒音		齒莖音		硬口蓋音		軟口蓋音		声門音	
	無声	有声	無声	有声	無声	有声	無声	有声	無声	有声	無声	有声	無声	有声
破裂音	p	b					t	d			k	g		
摩擦音			f	v	θ	ð	s	z	ʃ	ʒ			h	
破擦音									tʃ	dʒ				
鼻音		m						n				ŋ		
側音								l						
半母音		w						r		j				

育的見地よりすれば、若干の異音表記を加えた方が効果的と言えよう。そこで以上の認識に立って英米音の表記問題を考えることになるが、英米音においては子音の音素体系は前掲の表のように24個の音素が一般に認められている。

破擦音 /tʃ/ と /dʒ/ をそれぞれ一音素と認めるか二音素の連続と認めるかは問題となるところだが、一般に一音素とされ、 /ç/, /j/ のように表記されることもあるが、このような新記号は教育的観点からは避けて、 /tʃ/, /dʒ/ を採る方がよいと思う。子音に関する異音表記の検討は後述するとして、取り敢えず英米共通の発音表記としては、以上の記号体系で問題がないと思われる。

英米音の母音図を Jones 及び Kenyon を参考にして描くと母音組織は次のようになる。



先ず英音に見られる /i:/ と /i/, /u:/ と /u/ の対立であるが、これは長短を量的な差のみならず質的な差をも表わすものとして記号化しているものである。しかし、音の長さが示差的な機能をもつ日本語を使用して

いる学生には単なる長さの差としてのみ受取られる懸念がある。これ等を IPA や Kenyon, Fries, Thomas 等は /i/ と /ɪ/, /u/ と /ʊ/ と表記しているが, Gimson は更に /i:/ と /ɪ/, /u:/ と /ʊ/ のように長音記号をつけている⁶。これは英国人が長短の差を依然意識していることの証左ともとれるが, このような過剰表記は教育的見地からは容認されてよかろう。事実, Jones の実験測定の結果⁷を見ると,

seat	0.124 sec.	seating	0.087 sec.
sit	0.085 sec.	sitting	0.052 sec.
bead	0.325 sec.	beat	0.147 sec.
bid	0.15 sec.	bit	0.054 sec.

となっており, 同一の音声環境にあっては /i:/ は明らかに /ɪ/ より長いのである。このような差は米音では僅かである。⁸ 而も, その差が縮まりつつあると言われているが, Jones は英音にもそのような傾向があることを認め, 長音記号に取って代わる表記法の必要を予想している。⁹ しかし, 現時点では, 英音に対しては一応 Gimson の表記法 /i:/, /ɪ/ を採り, 米音は Kenyon 式とするのがよかろう。Jones 式の /u:/ と /ʊ/ も同様に, 英音では /u:/ と /ʊ/ 米音では /u/ と /ʊ/ とする。尚, この(英) /i:/, (米) /i/ 及び (英) /u:/, (米) /u/ は Bloch, Trager, Smith などに代表される別の音素表記では複式解釈 (Binary interpretation) つまり, 母音+半母音に解釈して /ij/, /uw/ と二重母音化して表記される。随に /i:/ や /u:/ は強強勢の位置にあるときは二重母音化する傾向があるが, そうならない場合も多いし, わたり (Glide) も微弱で非示差的と考えることも出来る上, 日本人学生の場合, /ij/ : /i/, /uw/ : /u/ の表記ではそれぞれの /i/, /u/ が同じ音価をもつ印象を与える惧れがある。けれども /j/, /w/ の前の /i/, /u/ は単独の /i/, /u/ より舌の位置が高い処で調音されるのである。このことからしても単一母音として表記した方がよいという見解を採る次第である。

二重母音に関しては英米音共に第2要素である音節副音に /j/, /w/ を使用せず /I/, /U/ (音節副音だから、本来なら /I/, /U/ とすべきであるが、実用的見地から省く) を当てて /ei/, /aɪ/, /ɔɪ/, /əʊ/, /ou/, /aʊ/ と表記する。Gimson は私案の /aɪ/ を /aɪ/ としている¹⁰が、記号の簡略化を図って /aʊ/ と歩調を揃えたい。尚、音節副音に /j/, /w/ を採用するのは Gimson と同様の理由で避けた。¹¹ /əʊ/ を米音 /ou/ に対して採用したのは異音表記の範囲を広くするものとなるが、Gimson も言っている¹³ ように教育的観点からよいと判断したからである。

以上の closing diphthong に対して、centering diphthong は /ɪə/, /eə/, uə/ と表記する。/eə/ は /eə/ とされることが多いが、/eə/ と記号を節約することが出来る。これ等は何れも peer, pear, poor の母音で本来 /r/ 音があったものであり、それが残っている米音の場合には半母音音素の /r/ を用いて /ɪr/, /er/, /ur/ と表記出来る。このような対応関係は英音 /ɑ:/, /ɔ:/, /ə:/, /ə/ についても言える。これ等は arm, board, murmur の中に見られる母音で、前例に倣って /ɑr/, /ɔr/, /ər/ が得られる。米音では母音の長さは音素的対立を示さないから /ə:/ と /ə/ に対応するものとしては共に /ər/ とすることが出来る。尚、英音の例えば cut の母音 [ʌ] と、sofa の末尾の母音 [ə] は対立を示さぬから /ə/ として記号を減らすことが可能である。また、英音の /ə:/ と /ə/ は Jones の発音辞典の13版では母音図の中で同一の位置に表示されているが、戸村実氏も言われる¹³ ように Jones の [ə] は弱母音専用に設定されたもので、音価ゼロと強母音各種との中間に無限に現われる曖昧な母音の総称で、それが長くなれば [ə:] となるというものではないし、調音点が異なる上、bird /'bɜ:d/ と bud/'bʌd/ (Jones では ['bʌd]) の対立も見られるから Gimson 流に /ə:/ を /ɜ:/ (これも過剰表記) と表記することにする。(尚、単音節語に強勢記号を附することについては後述する)。/e/, /æ/, /ɔ/ は英米共通に、また、/ɑ/ は米音に用いられる。

Trager, Smith, Gleason 等米国の言語学者の幾らかは /i/ 音素を設定しているが、これは /ɪ/ の異音と見做してよからう。

IV

以上で一通り英米音表記のための発音記号が出揃ったので、私案による英米音の発音表記を試みると次のようになる。

英音	米音	
/i:/	/i/	seat 英 /'si:t/, 米 /'sit/
/ɪ/	/ɪ/	sit /'sit/, bid /'bɪd/
/ɪ/	/i/	city 英 /'sɪtɪ/ 米 /'sɪti/
/e/	/e/	get /'get/, egg /'eg/
/æ/	/æ/	hat /'hæt/, man /'mæn/
/ɑ:/	/ɑ/	palm 英 /'pɑ:m/ 米 /'pɑm/
/ɑ:/	/æ/	pass 英 /'pɑ:s/ 米 /pæs/
/ɑ:/	/ɑr/	arm 英 /'ɑ:m/ 米 /'ɑrm/
/ɔ/	/ɔ/	dog /'dɔg/, soft /'sɔft/
/ɔ/	/ɑ/	cot 英 /'kɔt/, 米 /'kɑt/
/ɔ:/	/ɔ/	caught 英 /'kɔ:t/, 米 /'kɑt/
/ɔ:/	/ɔr/	door 英 /'dɔ:/ 米 /'dɔr/
/ʊ/	/u/	pull /'pʊl/, wood /'wʊd/
/u:/	/u/	pool 英 /'pu:l/, 米 /'pul/
/ə/	/ə/	cut /'kət/, bud /'bəd/
/ə/	/ər/	water 英 /'wɔ:tə/, 米 /'wɑtər/
/ɜ:/	/ər/	bird 英 /'bɜ:d/, 米 /'bɜrd/
/ɪə/	/ɪr/	dear 英 /'dɪə/, 米 /'dɪr/
/eə/	/er/	care 英 /'keə/, 米 /'ker/
/uə/	/ur/	moor 英 /'muə/, 米 /'mur/

/aɪ/	/aɪ/	light /'laɪt/, side /'saɪd/
/aʊ/	/aʊ/	out /'aʊt/, crowd /'kraʊd/
/ɔɪ/	/ɔɪ/	boy /'bɔɪ/, void /'vɔɪd/
/əʊ/	/oʊ/	boat 英 /'bəʊt/ 米 /'boʊt/
/eɪ/	/eɪ/	rate /reɪt/, aid /'eɪd/

音素表記を基に若干の異音表記を混えて英米音の発音記号体系の設定を試みて得たのが以上の試案である。これで英米音の殆んどは表記出来るものと信ずるが、既述のように音素表記はその言語の意味を区別する最小限の必要数の記号であって、実際の英語の発音教育には、大学レベルの場合、言わば remedial な側面もあるので、各音素の余剰的特徴の分析指導は重要な意義をもっている。特に、或る音素の中には正しい聴解を著しく妨げるものがあり、また、然るべき調音指導によって異音として現われる余剰的特徴を的確に捉えて発音することが出来るならば、所謂「外国人訛」の無い英語らしい発音が可能となるので是非ともかかる音素の異音分布を認識させたい。殊に、大学生を対象とした成人教育では、限られた時間内で効果を挙げるのには知的理解に訴えるのが一番であり、さきにも触れた音声感覚の elasticity の欠如、母国語の干渉等を考えると、単に音素表記と実際に発音される当該音声とを対比させても効果は余り期待出来ない。即ち、特定音素が音声環境により異って実現される各異音を聴いても、何となく聴き逃がして、その異音的差異に気づかない公算が極めて大きい。然るに、各異音を若干の異音表記を混えて学生に指導するならば、それは音声の微妙な差異に対する感受性を高め、且つ、その表記記号との間に観念連合が生じ、記憶への定着を強化することは期して待つべきものがある。なお、申すまでもないことだが、上述の事柄からも容易に察せられるように、調音法の指導は絶対欠かせないということである。幾ら異音表記の所謂精密表記をしてその音声を反復聴かせても、矢張りその音声の調音法を学生に理解させなくて十分な成果は望めないと言えよう。Catford と

Pisoni もこれに関し次のように言っている。

Be that as it may, our investigation indicates that “ear-training” and mimicking alone are less effective than articulatory training in teaching both the auditory discrimination and the production of exotic sound.¹⁴

つまり教授者側の音声学的知識が求められる所似である。

V

次に、これ等余剰の特徴の中で教育的観点から必要と思われるものに限り項目別に論述を進めよう。

子音

1. 無声化 (Devoicing)

有声子音の或るもの、破裂音 /b, d, g/ や摩擦音 /v, z, ð, ʒ/ 及び破擦音 /dʒ/ は音声環境により無声化する傾向があるが、就中、語尾においてそれが著しい。e. g. live [ˈlɪv̥],¹⁵ bulb [ˈbʌlb̥], good [ˈɡʊd̥], bag [ˈbæɡ̥], dogs [ˈdɔɡz̥], breathe [ˈbriːð̥], rouge [ˈruːʒ̥], bridge [ˈbrɪdʒ̥]. これ等は何れも軟音 (lenis) の特性をもっているのであって夫々 [f, p, t, k, s, θ, ʃ, tʃ] で置き換えないように注意せねばならない。他に [l, r, w, j] が [p, t, k] に続く場合, eg. please [ˈpliːz], pray [ˈpreɪ], try [ˈtraɪ], clean [ˈkliːn], twin [ˈtwɪn], quick [ˈkwɪk], pew [ˈpjuː], tune [ˈtjuːn], cue [ˈkjuː] がある。

日本人は兎角、子音連結の場合、子音と子音の間に母音を挿入し勝ちであるから、この種の異音表記による発音練習はそういった傾向の阻止に役立つであろう。

2. 有声化 (Vocalizing)

米音では /t/ は屢々有声音の間では同化作用により有声化されて [t̚] または [ɾ] になる。

A) 母音と母音の間で弱音節の前に来たとき, eg. better [ˈbeʃər],
water [ˈwɑ:tər]

B) [l] の後, 音節主音 [ɪ] 前, [n] の後に来たとき,
melted [ˈmeltɪd], little [ˈlɪtl̩], twenty [ˈtwenti] [t̪] または [r] は
それぞれ [d], [r] (英音の弾音) に近い音として聞えるが, その調音
指導に注意を要するのは無声化の場合と同様である.

/p/, /k/, も /t/ と同様の音声環境で有声化を示す. e. g. rapid [ˈræpɪd]
apple [ˈæp̚], racket [ˈrækt̪], nickle [ˈnɪkl̪]. 但し /t/ 程著しくない
から一般には余り採り上げられないようである. 次に /t/ は /n/ と母音
の間及び, /n/ と /l/ の間に来るときに省略され得る. e. g. twenty [ˈtweni]
international [ˌɪnəˈnæʃən], gentleman [ˈdʒenlmən]. この現象は頻繁
に聞かれるから注意を要する.

3. 氣息音 (Aspiration)

英米音 (特に南部英語音) においては, 日本語では余り用いられない
氣息音が, /p/, /t/, /k/ のような無声破裂音の後に強勢ある母音が
来る場合, 呼気圧が高くなるため, /h/ に似た強い気音として聞かれ
る. その強さは /p/, /t/, /k/ の順である. 記号は [ʰ] または [ˈ]
(IPA) である, ここでは分かり易い [ʰ] を採る. e. g. pin [ˈpʰɪn], paper
[ˈpʰeɪpə] tap [ˈtʰæp], tent [ˈtʰent], keep [ˈkʰi:p], kicker [ˈkʰɪkə],
cf. spin [ˈspɪn], stop [ˈstɒp], skip [ˈskɪp].

4. 不完全破裂音 (Incomplete plosive consonants)

破裂音は屢々十分に発音されないことがある, 日本人は破裂音を悉く破
裂するものと思こんでいることが多いので, 特別な記号 [ˈ] を附して
異音練習をするのがよいであろう.

A) 語尾

pup [ˈpʰəpˈ], seat [ˈsi:tˈ], cake [ˈkʰeɪkˈ]

B) 語中

lamppost [ˈlæmpʰɪpʰəʊst], night-time [ˈnaɪtɪtʰaɪm] book-case
[ˈbʊkɪkʰeɪs], action [ˈækʰʃən] bedtime [ˈbedɪtʰaɪm], begged
[ˈbegˈdɔ] exactly [ɪgɪzækˈtɪli]

5. 声門閉鎖音 (Glottal stop)

声門閉鎖音 [ʔ] が /t/ の代用をすることがある。これは母音と [l, m, n, l, w, j] の間に出現する。e. g. mutton [ˈmʊʔn], bottle [ˈbɒʔl] greatness [ˈɡreɪʔnɪs], fort-night [ˈfɔ:ʔnaɪt] これ等の発音は外国人は真似る程のこともないが、その存在は知っておくべきだと Jones も言っている。¹⁶

6. 音節構成子音 (Syllabic consonant)

/l, m, n, ŋ/ は音節を構成することが出来るが、このような音節主音的有声子音としての /l, m, n, ŋ/ は [ɹ] という記号を用いて表わす。e. g. button [ˈbʌtɹŋ], ribbon [ˈrɪbɹŋ], sudden [ˈsʌdɹŋ] thicken [ˈθɪkɹŋ] (以上 Nasal plosion に注意) little [ˈlɪɹl], medal [ˈmedɹl] (以上 lateral plosion に注意). rhythm [ˈrɪðɹŋ], often [ˈɔ:fɹŋ], lightening [ˈlaɪtɹŋɪŋ] cf. lightning [ˈlaɪtɹŋɪŋ]

VI

母音

母音の長さ

母音の長さは英米音両方共音素論的な意味は今日においては無いと言っ
てよいことは前述した通りである。しかし、これを余剰的特徴として見る
とき、それは矢張り存在しており、無声子音の有声化や、有声子音の無声
化のために弁別に困難を生じた場合など、その硬音、軟音などと相俟って
その識別に一役買うと考えられているから、おろそかに出来ない。Jones
は音の長さを定める要素として次の五つを挙げている。¹⁷ (1)母音自体の性
質, (2)隣り合っている音の性質, (3)強勢の度合い, (4)一つの強強勢と次の
強強勢の間に介在する音節の数, (5)音調。このような複雑な要素が絡み合

って特定の母音の長さが決定されるとなると、逆も正確な長さ表記など出来ないことは自明の理であるが、音素表記で長音記号をつけなかった米音においても、異音表記においては Kenyon が *American Pronunciation* (1962)¹⁸ で用いているように、長音記号 [ː] と半長音記号 [ˑ] を採用して、大雑把に次の程度の区別は必要であろう。

1. 強強勢をもった同じ母音については、語尾または有声子音の前に来たときは無声子音の前に来たときよりも長い。

sea [ˈsiː], seed [ˈsiːd], seat [ˈsiːt]
 spa [ˈspɑː], cod [ˈkɑːd], cot [ˈkɑːt]
 bad [ˈbæːd], bat [ˈbæːt]
 caw [ˈkɔː], dog [ˈdɔːg], naught [ˈnɔːt],
 new [ˈn(j)uː] news [ˈn(j)uːz] deuce [ˈd(j)uːs]
 car [ˈkɑːr] card [ˈkɑːrd] cart [ˈkɑːrt],
 err [ˈɜːr] bird [ˈbɜːrd] curse [ˈkɜːrs]

2. 強強勢をもった同じ母音については語尾に来たときに最も長く、次に語尾の子音の前に来たときに長く、弱音節が後に続くときが一番短かい。

ah [ˈɑː], yacht [ˈjɑːt], yachting [ˈjɑːtɪŋ]
 pass [ˈpæːs], passing [ˈpæːsɪŋ]
 Saw [ˈsɔː], Sauce [ˈsɔːs], saucer [ˈsɔːsər]
 boo [ˈbuː], boost [ˈbuːst] booster [ˈbustər]
 sir [ˈsɜːr], surf [ˈsɜːf] surfing [ˈsɜːfɪŋ]

以上は大体の目安であり、現実には既述の諸要因を周知徹底の上、それぞれの発話における音声環境に応じて個々に習得させる外なからう。特に日本の学生は日本語とは異質的な英語のリズムは最も苦手とするところであり、¹⁹ 母音の長さを狂わせる惧れるが多分にあるから、単語のレベルを超えた表記に際しては特に注意を要する。

VII

強勢

英語の強勢は規則によって学べるものではなく、仮令、規則を設けても数多くの例外が伴う。従って外国人学生は単語の強勢を個々に学習する外ない、と Jones は言っている。²⁰

さて、表記の問題であるが、英語は *stress-timed rhythm* を特色としていることから分るように、文及び語における強勢が重要性を帯びているのであって、強勢の所在位置を示す強勢記号は発音記号の重要部分をなすことは申すまでもない。アメリカ構造言語学では普通、第1強勢、第2強勢、第3強勢、弱強勢と四段階に分けているが、落差が少ないため、この四段階の弁別は native すら困難としている。現行の辞書で 4-stress system を採用しているものは見当たらず点からしても、教育的には当然 3-stress system がよからう。²¹

強勢表記の仕方の特徴として、例えば Jones 式（英国式）は単語の第1強勢の前の第2強勢は記すが、第1強勢後の第2強勢は原則としてこれを認めず、記さないが、Kenyon-Knott の発音辞典を始め、米国の辞典は第1強勢の後の第2強勢をも示している。（但し、Gimson は第1強勢の後の第2強勢を認めている）。²² 本表記法では米国式を採るべきと考える。米国式を採る理由は次のような例が示すように英音と米音の違いを示すのに第1強勢の後の第2強勢を表記する必要が生じるからである。

英 米

e. g. dormitory /'dɔ:mɪt(ə)rɪ/, /'dɔ:mɪ,tɔ:ri/
 Consequence /'kɔnsɪkwəns/, /'kɔnsɪ,kwəns/
 necessary /'nesɪsəri/, /'nesə,seri/
 testimony /'testɪməni/, /'testə,mouni/
 authoritative /ɔ:'θɔ:ɪtətɪv/, /ə'θɔ:rə,tɪtɪv/

(第1強勢は /'/, 第2強勢は /ɪ/, 弱強勢は記号無しで相対的に示される。記号は音節の前につける)。

次に単音節語に強勢記号をつける問題であるが、強勢そのものは相対的なものであるから、比較する相手が無い単音節語につける必要がないというのは、それ自身一理あるが、全然記号をつけないのは、単音節語には強勢が全く無いという現実の言語事象に反する印象を与える惧れもあり、また、強勢記号をつけることにより、竹林滋氏も指摘される²³ように色々な利点もある(例えば、機能語と呼ばれる語の表記が合理的になるとして次の例を氏は挙げておられる。e. g. for [ˈfɔ:(r), fə(r)], of [ˈɒv, əv], can [ˈkæn, kən], in [ˈɪn, ɪn] on [ˈɒn, ˈɒn; ɔn, ɒn]) のでつける方がよいと思う。この問題について詳しくは同氏の「単音節語のアクセント」と題する発表があるので重複を避けるが、本表記では schwa sound と言われる /ə/ を以て /A/ に代えているので hut /ˈhət/ とした方が誤解を招く必配が無くてよい。

VIII

単語レベルでの表記法の試案は概略以上の通りであるが、音素表記を土台に異音表記を混えた英米音の表記法をわが国の大学英語教育との関連において考察してみたわけである。勿論発音表記だけで発音教育が事足りりということは全くあり得ないのは今更申すまでもないことであるが、少なくとも大学英語教育においては、この程度の表記法を理解習得させようという試みがなされても可いのではなからうか。そして、それが然るべき調音法の指導の下に表記記号とそれが表わす言語音の聴覚像が学生の記憶の中でしっかり結びつき定着を示すならば、先ず単語レベルの正しい発音の基礎が固定し、より高次のレベルへの跳躍台が出来上るわけで、学生の発音矯正並びに学習能率の向上に裨益するところ計り知れぬものがある。換言すれば、発音記号は、外国語の音声という漠然且つ複雑な音声経験を

限られた数の範疇に纏めるため、一旦それを正しく習得すれば常に簡単に音声表象を喚起することが出来ることを意味する。従って異音表記などの場合は若干精密度が加わるだけに学習の煩わしさを増すが、それでも学習上の労力は十分に報われよう。Prator も言う²⁴ ように、大抵の人間は視覚を通して学んだ方が聴覚を通して学ぶよりも優れた効果を挙げるから、主として聴覚に頼らねばならぬ発音の学習においても、視覚補助教材としての発音記号を利用出来るということは利するところ大であって、聴覚と視覚の二つを通して学習することは、聴覚のみに比べて四倍に能率を高めると言って過言でなからう。

実際にわれわれが耳にする音声は絶えず或る幅を以て流動しているから、一つの発音記号に対応する音声は只一つしかないように考える発音記号過信は巖に戒むべきであろうが、教授者側から言えば、音声学、音韻論の知識をふまえた上で発音表記に対する正しい認識を以てこれを教場において活用するならば可成りの成果が期待出来るものと思う。

注

1. R. H. Gerhard, "A Suggested Simple System of Transcription for Use by Foreign Students of Standard American English", *In Honour of Daniel Jones* (London : Longmans, Green & Co., 1964), p. 280.
2. Daniel Jones, *An Outline of English Phonetics* (Cambridge : W. Heffer & Sons Ltd., 1950), pp. 310—314.
3. N. Chomsky and M. Halle, *The Sound Pattern of English* (New York : Harper, 1968), p. 49.
4. 竹林 滋「英米音の表記法——初・中級の学習者用の実用表記」現代英語教育 (Sep., 1970) (東京 : 研究社), pp. 20—21, 及び保谷一三「英語辞書の発音表記について」中島文雄教授還暦記念論文集 (東京 : 研究社, 1965), pp. 46—52.
5. Joseph Greenberg, *Anthropological Linguistics* (New York : Random House, 1968), p. 85.
6. A. C. Gimson, *An Introduction to the Pronunciation of English* (London :

Edward Arnold, 1970).

7. Daniel Jones, *The Phoneme : Its Nature and Use* (Cambridge : W. Heffer & Sons Ltd., 1967), pp.128—129.
8. 例えば, E. Haugen and W. F. Twadell, "Facts and Phonemics", *Language*, XVIII, 281—2 に見られる Lehmann と Heffner の実験データは次のようになっている。

Lehmann		Heffner		
-t	-d	-t	-d	
/i:/	0.19 sec.	0.28 sec.	0.21 sec.	0.28 sec.
/ɪ/	0.16 sec.	0.2 sec.	0.15 sec.	0.2 sec.

これから判断すると英音の場合のように /i:/ が /ɪ/ の2倍以上になることがない。

9. Daniel Jones, *An Outline of English Phonetics*, § 879. 及び Daniel Jones, *The Phoneme*, § 519.
10. A. C. Gimson, *op. cit.*
11. *Ibid.*, p. 93.
12. Daniel Jones, *English Pronouncing Dictionary* (revised by A. C. Gimson, 13 th ed. ; London : J. M. Dent & Sons Ltd., 1967), p. viii.
13. 戸村 実「Phonetics と Phonemics の間」現代英語教育 (May, 1970) (東京 : 研究社), p.11. Cf. Jones, *The Phoneme*, § 517. "It has been pointed out (§§197—202) that the vowel of *bird* is best assigned to the same phoneme as short ə, since its quality is practically identical with one of the varieties of short ə." 本稿では実用的配慮から 厳密な音素論的立場をとらないことにしている。
14. J. C. Catford and David B. Pisoni, "Auditory vs. Articulatory Training in Exotic Sounds", *The Modern Language Journal*, Vol. LIV, (Nov., 1970), 481.
15. 正確には [ʰlɪvɥ] となる。
16. Daniel Jones, *An Outline of English Phonetics*, p, 139.
17. Daniel Jones, *The Phoneme*, p. 124.
18. John S. Kenyon, *American Pronunciation* (Ann Arbor : George Wahr, 1962), pp. 62—63.
19. Cf. Daniel Jones, *An Outline of English*, § 908.
20. *Ibid.*, § 920.

21. Fred M. Christ, *Foreign Accent* (Englewood Cliffs, N. J. : Prentice-Hall Inc., 1964), p. 61.
22. A. C. Gimson, *op. cit.*
23. 竹林 滋「単音節語のアクセント」英語青年 Vol. CXIV (Feb., 1968) (東京 : 研究社), 93.
24. Clifford H. Prator, *Manual of American English Pronunciation* (New York : Rinehart & Co., Inc., 1957), p. 1.